

竹取物語

むかし、いつの頃でありましたか、竹取りの翁といふ人がありました。ほんとうの名は讃岐の造麻呂といふのでしたが、毎日のように野山の竹藪にはひつて、竹を切り取つて、いろ／＼の物を造り、それを商ふことにしてゐましたので、俗に竹取りの翁といふ名で通つてゐました。ある日、いつものように竹藪に入り込んで見ますと、一本妙に光る竹の幹がありました。不思議に思つて近寄つて、そつと切つて見ると、その切つた筒の中に高さ三寸ばかりの美しい女の子がゐました。いつも見慣れてゐる藪の竹の中にある人ですから、きつと、天が我が子として與へてくれたものであらうと考へて、その子を手の上に載せて持ち帰り、妻のお婆さんに渡して、よく育てるようにいひつけました。お婆さんもちの子の大そう美しいのを喜んで、籠の中に入れて大切に育てました。







このことがあつてからも、翁はやはり竹を取つて、その日々を送つてゐましたが、奇妙なことには、多くの竹を切るうちに節と節との間に、黄金がはひつてゐる竹を見つけることが度々ありました。それで翁の家は次第に裕福になりました。

ところで、竹の中から出た子は、育て方がよかつたと見えて、すん／＼大きくなつて、三月ばかりたつうちに一人前の人になりました。そこで少女にふさはしい髪飾りや衣裳をさせましたが、大事の子ですから、家の奥にかこつて外へは少しも出さずに、いよく心を入れて養ひました。大きくなるにしたがつて少女の顔かたちはますます／＼麗しくなり、とてもこの世界にないくらゐなばかりか、家の中が隅から隅まで光り輝きました。翁にはこの子を見るのが何よりの薬で、また何よりの慰みでした。その間に相變らず竹を取つては、黄金を手に入れましたので、遂には大した身代になつて、家屋敷も大きく構へ、召し使ひなどもたくさん置いて、世間からも敬はれるようになりました。さて、これまでつい少女の名をつけることを忘れてゐましたが、もう大きくなつて名のないのも變だと氣づいて、



い、名づけ親を頼んで名をつけて貰ひました。その名は嫋竹の赫映姫といふのでした。その頃の習慣にしたがつて、三日の間、大宴會を開いて、近所の人たちや、その他、多くの男女をよんで祝ひました。

この美しい少女の評判が高くなつたので、世間の男たちは妻に貰ひたい、又見るだけでも見ておきたいと思つて、家の近くに來て、すき間のようなところから覗かうとしました。が、どうしても姿を見ることが出來ません。せめて家の人に逢つて、ものをいはうとしても、それさへ取り合つてくれぬ始末で、人々はいよ／＼氣を揉んで騒ぐのでした。そのうちで、夜も晝もぶつ通しに家の側を離れずに、どうにかして赫映姫に逢つて志を見せようと思ふ熱心家が五人ありました。みな位の高い身分の尊い方で、一人は石造皇子、一人は車持皇子、一人は右大臣阿倍御主人、一人は大納言大伴御行、一人は中納言石上麻呂で、ありました。この人たちは思ひ／＼に手だてをめぐらして姫を手に入れようと思ひました。が、誰も成功しませんでした。翁もあまりのことに思つて、ある時、姫に向つて、



「たゞの人でないとはいひながら、今日まで養ひ育てたわしを親と思つて、わしのいふことをきいて貰ひたい」

と、前置きして、

「わしは七十の阪を越して、もういつ命が終るかわからぬ。今のうちによい婿をとつて、心残りのないようにして置きたい。姫を一しよう懸命に思つてゐる方がこんなにくさんあるのだから、このうちから心になつた人を選んではどうだらう」

と、いひますと、姫は案外の顔をして答へ澁つてゐましたが、思ひ切つて、

「私の思ひどほりの深い志を見せた方なくては、夫と定めることは出来ません。それは大してむづかしいことでもありません。五人の方々に私の欲しいと思ふ物を註文して、それを間違ひなく持つて来て下さる方にお仕へすることに致しませう」

と、いひました。翁も少し安心して、例の五人の人たちの集つてゐるところに行つて、そのことを告げますと、みな異存のあらうはずがありませんから、すぐに承知しました。



ところが姫の註文といふのはなかくむづかしいことでした。それは五人とも別々で、石造皇子には天竺にある佛の御石の鉢、車持皇子には東海の蓬萊山にある銀の根、金の莖、白玉の實をもつた木の枝一本、阿倍の右大臣には唐土にある火鼠の皮衣、大伴の大納言には龍の首についてゐる五色の玉、石上の中納言には燕のもつてゐる子安貝一つといふのであります。そこで翁はいひました。

「それはなかくの難題だ。そんなことは申されない」

しかし、姫は、

「たいしてむづかしいことではありません」と、いひ切つて平氣でをります。翁は仕方なしに姫の註文通りを傳へますと、みなあきれかへつて家へ引き取りました。

それでも、どうにかして赫映姫を自分の妻にしようと覺悟した五人は、それぐいろいろの工夫をして註文の品を見つけようとなりました。

第一番に、石造皇子は、ずるい方に才のあつた方ですから、註文の佛の御石の鉢を取りに



天竺へ行つたように見せかけて、三年ばかりたつて、大和の國のある山寺の賓頭盧様の前に置いてある石の鉢の眞黒に煤けたのを、もつたいらしく錦の袋に入れて姫のもとにさし出しました。ところが、立派な光のあるはずの鉢に螢火ほどの光もないので、すぐに註文ちがひといつて跳ねつけられてしまひました。

第二番に、車持皇子は、蓬萊の玉の枝を取りに行くといひふらして船出をするにはしましたが、實は三日目にこつそりと歸つて、かねぐたくんで置いた通り、上手の玉職人を多く召し寄せて、ひそかに註文に似た玉の枝を作らせて、姫のところに持つて行きました。翁も姫もその細工の立派なのに驚いてゐますと、そこへ運わるく玉職人の親方がやつて来て、千日あまりも骨折つて作つたのに、まだ細工賃を下さるといふ御沙汰がないと、苦情を持ち込みましたので、まやかしものといふことがわかつて、これも忽ち突つ返され、皇子は大恥をかい引きました。

第三番の阿倍の右大臣は財産家でしたから、あまり悪くは巧まず、ちようど、その



年に日本に來た唐船に逃へて火鼠の皮衣といふ物を買つて來るようになり頼みました。やがて、その商人は、やう／＼のことで元は天竺にあつたのを求めたといふ手紙を添へて、皮衣らしいものを送り、前に預つた代金の不足を請求して來ました。大臣は喜んで品物を見ると、皮衣は紺青色で毛のさきは黄金色をしてゐます。これならば姫の氣に入るに違ひない、きつと自分は姫のお婿さんになれるだらうなどと考へて、大めかしにめかし込んで出かけました。姫も一時は本物かと思つて内々心配しましたが、火に焼けないはずだから、試して見ようといふので、火をつけさせて見ると、一たまりもなくめら／＼と焼けました。そこで右大臣もすつかり當てが外れました。

四番めの大伴の大納言は、家來どもを集めて嚴命を下し、必ず龍の首の玉を取つて來いといつて、邸内にある絹、綿、錢のありたけを出して路用にさせました。ところが家來たちは主人の愚なことを謗り、玉を取りに行くふりをして、めい／＼の勝手な方へ出かけた。り、自分の家に引き籠つたりしてゐました。右大臣は待ちかねて、自分でも遠い海に漕ぎ



出して、龍を見つて次第矢先にかけて射落さうと思つてゐるうちに、九州の方へ吹き流されて、烈しい雷雨に打たれ、その後、明石の濱に吹き返され、波風に揉まれて死人のようになつて磯端に倒れてゐました。やう／＼のこと、國の役人の世話で手輿に乗せられて家に着きました。そこへ家來どもが駈けつけて、お見舞ひを申し上げると、大納言は杏のようになつて赤くなつた眼を開いて、

「龍は雷のようなものと見えた。あれを殺してもしたら、この方の命はあるまい。お前たちはよく龍を捕らずに來た。うい奴どもちや」

とおほめになつて、うちに少々残つてゐた物を褒美に取らせました。もちろん姫の難題には怖ぢ氣を振ひ、「赫映姫の大きがりめ」と叫んで、またと近寄らうともしませんでした。

五番めの石上の中納言は燕の子安貝を獲るのに苦心して、いろ／＼と人に相談して見た後、ある下役の男の勧めにつくことにしました。そこで、自分で籠に乗つて、綱で高い屋の棟にひきあげさせて、燕が卵を産むところをさぐるうちに、ふと平たい物をつかみあて



たので、嬉しがつて籠を降す合圖をしたところが、下にゐた人が綱をひきそこなつて、綱がぶつつりと切れて、運わるくも下にあつた鼎の上に落ちて眼を廻しました。水を飲ませられて漸く正氣になつた時、

「腰は痛むが子安貝は取つたぞ。それ見てくれ」

といひました。皆がそれを見ると、子安貝ではなくて燕の古糞でありました。中納言はそれきり腰も立たず、氣病も加はつて死んでしまひました。五人のうちであまりものいりもしなかつた代りに、智慧のないさまをして、一番惨い目を見たのがこの人です。

そのうちに、赫映姫が並ぶものゝないほど美しいといふ噂を、時の帝がお聞きになつて、一人の女官に、

「姫の姿がどのようなか見て參れ」

と仰せられました。その女官がさつそく竹取りの翁の家に出向いて勅旨を述べ、せひ姫に逢ひたいといふと、翁はかしこまつてそれを姫にとりつぎました。ところが姫は、



「別べつによい器量きりようでもありませんから、お使つかひに逢あふことは御免ごめんを蒙かうむります」

と拗すねて、どうすかしても、叱しかつても逢あはうとしませんので、女官じよかんは面めん目ぼくなさそうに宮きゆう中に立ちち歸かへつてそのことを申まをし上げました。帝みかどは更さらに翁おきなに御命ごめい令れいを下くだして、もし姫ひめを宮仕みやづかへにさし出だすならば、翁おきなに位くらゐをやらう。どうかして姫ひめを説といて納得なつとくさせてくれ。親おやの身みで、そのくらゐのこゝの出来できぬはずはなからうと仰おほせられました。翁おきなはその通とほりを姫ひめに傳つたへて、せひとも帝みかどのお言葉ことばに従したがひ、自分じぶんの頼たのみをかなへさせてくれといひますと、

「むりに宮仕みやづかへをしると仰おほせられるならば、私わたしの身みは消きえてしまひませう。あなたのお位くらゐをお貫もらひになるのを見て、私わたしは死しぬだけでございます」

と姫ひめが答こたへましたので、翁おきなはびつくりして、

「位くらゐを頂いたでも、そなたに死しなれてなんとしよう。しかし、宮仕みやづかへをしても死しなねばならぬ道理どうりはあるまい」

といつて歎なげきました。が、姫ひめはいよ／＼溢しよるばかりで、少すこしも聞ききいれる様子ようすがありません



なので、翁も手のつけようがなくなつて、どうしても宮中には上らぬといふことをお答へして、

「自分の家に生れた子供でもなく、むかし山で見つけたのを養つただけのことです。から、氣持ちも世間普通の人とはちがつてをりますので、残念ではございますが……」

と恐れ入つて申し添へました。帝はこれを聞き召されて、それならば翁の家にほど近い山邊に御狩りの行幸をする風にして姫を見に行くからと、そのことを翁に承知させて、きめた日に姫の家におなりになりました。すると、まばゆいように照り輝ぐ女がゐます。これこそ赫映姫に違ひないと思し召してお近寄りになると、その女は奥へ逃げて行きます。その袖をおとりになると、顔を隠しましたが、初めにちらと御覽になつて、聞いたよりも美人と思し召されて、

「逃げてでも許さぬ。宮中に連れ行くぞ」と仰せられました。



「私わたしがこの國くにで生うれたものでありますならば、お宮仕みやづかへも致いたしませうけれど、さうではございませんから、お連つれになることはかなひますまい」

と姫ひめは申まをし上げました。

「いや、そんなはずはない。どうあつても連つれて行く」

かねて支度したくしてあつたお輿こしに載のせようとなさると、姫ひめの形かたちは影かげのように消きえてしまひました。帝みかども驚おどろかれました。

「それではもう連つれては行くまい。せめて元もとの形かたちになつて見みせておくれ。それを見みて歸かへることにするから」

と、仰おほせられると、姫ひめはやがて元もとの姿すがたになりました。帝みかども致いたし方かたがございませんから、その日ひはお歸かへりになりましたが、それからといふもの、今いままで、すいぶん美うつくしいと思おもつた人ひとなども姫ひめとは比くらべものにならないと思おもひ召めすようになりました。それで、時々ときぐお手紙がみやお歌うたをお送おくりになると、それにはいち／＼お返事へんじをさし上げますので、やう／＼お心こころを慰なぐさ



めておいでになりました。

さうかうするうちに三年ばかりたちました。その年の春先から、赫映姫は、どうしたわけだか、月のよい晩になると、その月を眺めて悲しむようになりました。それがだん／＼つにつて、七月の十五夜などには泣いてばかりゐました。翁たちが心配して、月を見ることを止めるようにと諭しましたけれども、

「月を見ずにはゐられませぬ」

といつて、やはり月の出る時分になると、わざ／＼縁先などへ出て歎きます。翁にはそれが不思議でもあり、心が／＼でもありますので、ある時、そのわけを聞きますと、

「今までに、度々お話ししようと思ひましたが、御心配をかけるのもどうかと思つて、打ち明けることが出来ませんでした。實を申しますと、私はこの國の人間ではありません。月の都の者でございます。ある因縁があつて、この世界に来てゐるのですが、今は歸らねばならぬ時になりました。この八月の十五夜に迎への人たちが来れば、お別れして私は天上



に歸ります。その時はさぞお歎きになることであらうと、前々から悲しんでゐたのでございます」

「姫はさういつて、ひとしほ泣き入りました。それを聞くと、翁も氣違ひのように泣き出しました。」

「竹の中から拾つてこの年月、大事に育てたわが子を、誰が迎へに來ようとも渡すものではない。もし取つて行かれようものなら、わしこそ死んでしまひませう」

「月の都の父母は少しの間といつて、私をこの國によこされたのですが、もう長い年月がたちました。生みの親のことも忘れて、こゝのお二人に馴れ親しみましたので、私はお側を離れて行くのが、ほんとうに悲しうございます」

二人は大泣きに泣きました。家の者ども、顔かたちが美しいばかりでなく、上品で心だての優しい姫に、今更、永のお別れをするのが悲しくて、湯水も喉を通りませんでした。このことが帝のお耳に達しましたので、お使ひを下されてお見舞ひがありました。翁は



委細をお話して、

「この八月の十五日には天から迎への者が来ると申してをりますが、その時には人数をお遣はしになつて、月の都の人々を捉へて下さいませ」

と、泣く泣くお願いしました。お使ひが立ち歸つてその通りを申し上げると、帝は翁に同情されて、いよいよ十五日が来ると高野の少將といふ人を勅使として、武士二千人を遣つて竹取りの翁の家をまもらせられました。さて、屋根の上に千人、家のまはりの土手の上に千人といふ風に手分けして、天から降りて来る人々を撃ち退ける手はずであります。この他に家に召し仕はれてゐるもの大勢手ぐすね引いて待つてゐます。家の内は女どもが番をし、お婆さんは、姫を抱へて土藏の中にはひり、翁は土藏の戸を締めて戸口に控へてゐます。その時姫はいひました。

「それほどになさつても、なんの役にも立ちません。あの國の人が来れば、どこの戸もみなひとりでに開いて、戦はうとする人たちも萎えしびれたようになつて力が出ません」



「いやなあに、迎への人<sup>ひと</sup>がやつて來たら、ひどい目に遇<sup>あ</sup>はせて追<sup>お</sup>つ返<sup>か</sup>してやる」

と翁<sup>おきな</sup>はりきみました。姫<sup>ひめ</sup>も、年<sup>とし</sup>寄<sup>よ</sup>つた方<sup>かた</sup>々の老<sup>おい</sup>先<sup>さき</sup>も見<sup>み</sup>届<sup>とど</sup>けず<sup>に</sup>別<sup>わか</sup>れるのかと思<sup>おも</sup>へば、老<sup>おい</sup>とか悲<sup>かな</sup>しみとかのないあの國<sup>くに</sup>へ歸<sup>かへ</sup>るのも、一向<sup>いっこう</sup>に嬉<sup>うれ</sup>しくないといつてまた歎<sup>なげ</sup>きます。

そのうちに夜<sup>よる</sup>もなかばになつたと思<sup>おも</sup>ふと、家<sup>いへ</sup>のあたりが俄<sup>にはか</sup>にあかるくなつて、滿<sup>まん</sup>月<sup>げつ</sup>の十<sup>じゅう</sup>そう倍<sup>ばい</sup>ぐらゐの光<sup>ひかり</sup>で、人<sup>ひと</sup>々の毛<sup>け</sup>孔<sup>あな</sup>さへ見<sup>み</sup>えるほどであります。その時<sup>とき</sup>、空<sup>そら</sup>から雲<sup>くも</sup>に乗<sup>の</sup>つた人<sup>ひと</sup>々が降<sup>お</sup>りて來<sup>き</sup>て、地<sup>じ</sup>面<sup>めん</sup>から五<sup>ご</sup>尺<sup>しゃく</sup>ばかりの空<sup>くう</sup>中<sup>ちゆう</sup>に、ずらりと立<sup>た</sup>ち列<sup>なら</sup>びました。「それ來<sup>き</sup>たつ」と、武<sup>ぶ</sup>士<sup>し</sup>たちが得<sup>え</sup>物<sup>もの</sup>をとつて立<sup>た</sup>ち向<sup>むか</sup>はうとすると、誰<sup>だれ</sup>もかれも物<sup>もの</sup>に魅<sup>ほ</sup>はれたように戰<sup>たたか</sup>ふ氣<sup>き</sup>もなくなり、力<sup>ちから</sup>も出<sup>で</sup>ず、たゞ、ぼんやりとして目<sup>め</sup>をぱちくさせてゐるばかりであります。そこへ月<sup>つき</sup>の人<sup>ひと</sup>々は空<sup>そら</sup>を飛<sup>と</sup>ぶ車<sup>くるま</sup>を一つ持<sup>も</sup>つて來<sup>き</sup>ました。その中<sup>なか</sup>から頭<sup>かしら</sup>らしい一<sup>ひとり</sup>人<sup>り</sup>が翁<sup>おきな</sup>を呼<sup>よ</sup>び出<sup>だ</sup>して、

「汝<sup>なんぢ</sup>翁<sup>おきな</sup>よ、そちは少<sup>すこ</sup>しばかりの善<sup>い</sup>いことをしたので、それ<sup>それ</sup>を助<sup>たす</sup>けるために片<sup>かた</sup>時<sup>とき</sup>の間<sup>あひだ</sup>、姫<sup>ひめ</sup>を下<sup>くだ</sup>して、たくさんの黄<sup>おう</sup>金<sup>こん</sup>を儲<sup>まう</sup>けさせるようにしてやつたが、今<sup>いま</sup>は姫<sup>ひめ</sup>の罪<sup>つみ</sup>も消<sup>き</sup>えたので迎<sup>むか</sup>



へに來た。早く返すがよい」

と叫びます。翁が少し澁つてゐると、それには構はずに、

「さあ、姫、こんなきたないところにあるものではありません」

といつて、例の車をさし寄せると、不思議にも堅く閉じた格子も土蔵も自然と開いて、姫の體はする／＼と出ました。翁が留めようとあがくの姫は静かにおさへて、形見の文を書いて翁に渡し、また帝にさし上げる別の手紙を書いて、それに月の人々の持つて來た不死の藥一壺を添へて勅使に渡し、天の羽衣を着て、あの車に乗つて、百人ばかりの天人に取りまかれて、空高く昇つて行きました。これを見送つて翁夫婦はまた一しきり聲をあげて泣きましたが、なんのかひもありませんでした。

一方勅使は宮中に參上して、その夜の一部始終を申し上げて、かの手紙と藥をさし上げました。帝は、天に一番近い山は駿河の國にあると聞き召して、使ひの役人をその山に登らせて、不死の藥を焚かしめられました。それからはこの山を不死の山と呼ぶようにな



つて、その薬の煙りは今でも雲の中へ立ち昇るといふことであります。